入賞作品紹介

〈高松キャンパス　読書感想文〉

優秀賞

《$e^{\pi i}+1=0$》

1年4組（EC）　松本 愛花

これは、『博士の愛した数式』の中に出てくるオイラーの公式と呼ばれる数式だ。πというものは中学校で円周率を表す無理数だということを習っていたので知っていたが、他の文字については全く知らなかった。作品中に出てくる家政婦も「厄介なのはeだった。」というほどで、eは私にとっても理解に苦しむものだった。オイラーが算出したところによると、それはどこまでも果てしなく続いてゆく数であるらしいのだが、πと同様、循環しない無理数で、数学で最も重要な定数の一つであるらしい。またマイナス1の平方根で、虚数であるi。一見、何の結びつきも感じない、これらの文章。

> 果ての果てまで循環する数と、決して正体を見せない虚ろな数が、簡潔な軌跡を描き、一点に着地する。どこにも円は登場しないのに、予期せぬ宙からπがeの元に舞い下り、恥ずかしがり屋のiと握手をする。彼らは身を寄せ合い、じっと息をひそめているのだが、一人の人間が1つだけ足算をした途端、何の前触れもなく世界が転換する。すべてが0に抱き留められる。

一つの数式を、このように美しく表現すること、それは今まで私が感じたことのない世界観だった。数学好きの父の影響もあり、幼い頃から数学に対して何の抵抗もなく、ごくあたり前に数学と関わる生活をしてきた私にとって、この本に魅かれたのはごく自然のことだった。読書というよりも数学の勉強をしているかのような錯覚を抱くこともあった。私たちが普段、どれだけの数に囲まれ、それらがどのように関わり、影響し合っているか改めて考えさせられた。

興味深かったのは博士と家政婦との初めてのやりとりだ。事故で1975年以降の記憶が80分しか持たない博士は、毎日会う家政婦に毎日同じ質問をする。そして家政婦もまた、毎日同じ答えを返す。

「君の靴のサイズはいくつかね」

「24です」

「ほお、実に潔い数字だ。4の階乗だ」

二人の会話はいつもここから始まる。数学博士である彼にとって、数字を数学的に考えるのはとても容易なことだった。それと同時にコミュニケーションの大事なツールでもあった。考えてみれば、たった80分でそれまでの記憶を失ってしまうということは、1日のうちに何度もの「初めて」があるわけで、緊張の連続だ。けれども彼には「数学」という強みがある。どんな数字でも、数学的にその数が何にあたるのか即座に答えることができる。素数、階乗、完全数、双子素数、友愛数･･･などで、出てきた表し方はさまざまだ。

また、博士は家政婦の息子に√（ルート）というあだ名をつける。理由は彼の頭のてっぺんがルート記号のように平らだからというものであったが、その記号さえも博士にかかるとこう表現される。

「どんな数字でも嫌がらず自分の中にかくまってやる、実に寛大な記号」

と。数学博士らしい表現でありながらも、ルートへの愛が伝わる表現である。今だかつてルートをこのように見たことがあるだろうか。単なる記号であり、その役目以外に使ったことも考えたこともない。

感心したのは、家政婦とルートが博士に非常に協力的で思いやりを持って接していることだ。毎日会うたびに同じ質問をされても、同じ話を聞かされても、絶対に「その話はもう聞きました」とは言わないのだ。それは、博士に対する敬愛の気持ちにちがいない。彼の悲しむ顔を一瞬でも見たくないのだ。たとえ彼の記憶が80分しか持たなくても、その表情が自分たちの記憶に残ってしまわないように。「今」しかない博士にいつも心地よく過ごしてもらうために。

最後までミステリアスだったのは、義姉である未亡人の存在だ。博士が熱を出したときに、家政婦に嫉妬ともとれる行動をとるのだ。まるで、義弟の記憶にあるのは自分と過ごした日々だけだ、と言っているかのようだ。

『博士の愛した数式』の中でいろいろな愛を見た。博士の数学に対する愛、家政婦の息子に対する愛、家政婦とその息子の博士に対する愛、博士のルートに対する愛、そしておそらく相思相愛だった博士と未亡人の愛。それぞれがお互いを想い合い、いたわり合って関わっている。それこそが、初めに述べたオイラーの公式、《$e^{\pi i}+1=0$》で表されるということではないだろうか。

数学とは実に奥深い学問だと改めて感じることができた。その数学ともっともっと仲良くなれるよう、真剣に向き合っていきたい。

『博士の愛した数式』　小川洋子 著　新潮社　2003

〈高松キャンパス　読書感想文〉

優秀賞

前を向いて生きる

電気情報工学科3年　浅川 万知

「また宮城で地震やな。大丈夫かな。」

夏休みに入ってしばらくたった時、テレビを見ていて緊急速報が流れた。後で、東日本大震災の余震だと思われる、というニュースを聞き、8年もたっているのにまだ余震があるのかと驚いてしまった。

8年前。私は10才だった。想像できない大変なことが起こったと感じた。その後震災関連の特集やドキュメンタリー番組で、津波の押し寄せる映像や変わり果てた町の様子を何度も見て怖さがよみがえった。「復興」という言葉と共に、東北の町は活気を取り戻しつつあると聞くが、この本を読むと、震災が多くの人の人生を変え、今もそのつめあとを残していることがひしひしと伝わってきた。

改めて感じた。2万人近くの人が亡くなったり、今も行方不明だったりすると聞いていたが、その一人一人に家

族があり、思い出やつながりがあり、人生があったのだと。ニュースを見て、どんなに大変な状況だっただろうとか、家族を失ってつらいだろうとか思っていたけど、実際にその立場におかれた人、それも、私達と年齢が近かった人達の言葉や思いを知ると、現実をつきつけられた気持ちになった。そう。現実なのだ。本当に起こったことなのだ。今さらながら、私は実感した。

この本は、津波の被害を受けた東北の子どもたちに作文を書いてもらい、さらに、その子どもたちに筆者が直接話を聞きに行った記録である。７人の作文とその後の様子が記されているが、話を聞く筆者自身が、本当に東北の人たちの心に寄り添おうとしていることが伝わってきた。時には取材をした人から相談を受けたり、助けを求められたりしたということからも、それが分かる。

そして、あんなに辛く苦しい体験をしたにもかかわらず、作文には日常のささやかなことに喜び、周囲に感謝する気持ちを忘れない言葉が必ず出てくる。私なら自分の運命を恨んだり、だれかのせいにしたくなったりして愚痴ばかりを書いてしまいそうな気がする。実際に、家族やペットまで失い、自分一人だけ生き残ったら、私は生き残れたことに感謝するよりも、家族のもとに自分も行ってしまいたいと考えるだろう。作文を書いたどの人も、私ならとても乗りこえられそうにないと思える体験をしている。でも、そこから一歩ずつ進んでいっているのだ。７人の、作文を書いた人の写真や原稿用紙に書かれた直筆が、東北の人たちを身近に感じさせ、応援する気持ちがわきあがってきた。

あまりにもショックを受けたり、悲しい出来事に出会ったりすると、すぐには泣けないのだということも知った。それどころか、亡くなった人のことについて残された家族同士が話をすることも簡単なことではないなんて。そんな時に自分がどんな状態になるのかを想像することさえできない。何年たっても、海のそばに行くことが怖いという人もいるという。人の命や物的被害だけでなく、精神的な痛さも、震災の残した大きな被害なのだと思った。

しかし、私は感じた。東北の人たちの底力を。津波の被害にあっても、また同じ土地に住もうとする人がいるのがなぜか、不思議だったが、そこには、住んでいた人たちが大切にしていた「人のつながり」があった。そしてそれこそが「復興」への大きな手助けとなるのだ。避難所での様子を読むと、不自由で、不便な避難所の生活の中で、だれもが助け合い、他人のことまで思いやろうとしていることが伝わってくる。不便で苦しい毎日だとギスギスして、争いやもめごとばかり起こりそうな気がしていたが違っていた。家族を失ったからこそ、周りの人を大切にする気持ちも大きいのかもしれない。若い人が年をとった人を、大きい子どもが小さい子どもを、自然に支え、手助けをする。それぞれの人が得意分野を生かして避難所を運営する。集団の力とはこういうものなのだと思った。「みんな知り合いでみんな家族」と言える地域に住んでいることをうらやましく思った。

ここで紹介されていたのは、小学生から高校生までの子どもたちの作文だった。そして、その子どもたちこそ「復興」の中心だった。同じように家族を失っても、子どもが大人よりも早く立ち直り、震災を乗り越える姿が見られた。筆者も「子どもの前を向く力が家族の救いだった。」と書いている。どの子どもも震災を体験して傷つき、苦しんだけれど、大きく成長し、大人たちの支えとなった。

作文を書くことで気持ちの整理がつき、前を向いて進むことができた子どももいたし、作文をきっかけに新しい世界に向かっていった子どももいた。筆者は、逃げ方や被災の防ぎ方を伝えることだけでなく、被災後どのように生き、厳しい局面を克服していくかを伝えるべきだと言う。困難に出会ったり、うちのめされたりした後、どう生きていくべきか。私も自分のこととして考え、強く生きたい。

『「つなみ」の子どもたち 作文に書かれなかった物語』
森 健 著　文藝春秋　2011

〈高松キャンパス　千頁読破記〉

優秀賞

千頁読破記

電気情報工学科２年　**藤居 虹帆**

毎年やってくる夏休み。そして、夏休みの宿題といえば「感想文」。「今年は何を読もうかなぁ」と考えながら、とりあえず面白そうな本を手に取り読み始めてみた。

今年読んだのは、『記憶屋』『永い言い訳』『世界から猫が消えたなら』『君の膵臓をたべたい』の４冊である。この４冊の本を読んだ後、ある共通点に気づいた。それは、「死」と関係があるということだ。大切な人が亡くなってしまったという事実を受け入れられず、自らが犠牲になり、その事実を無かったことにする。妻を亡くし、残された夫と子どもが本当の家族関係を築くことで新たな希望を見つける。自分に残されたわずかな時間を過ごすために、何かを犠牲にすることで、日常生活のありがたさを知る。そして、死を宣告されたことで今まで交わることのなかったつながりができ、人として成長する。このように、「死」はいろいろな状況や立場によって感じることが大きく異なることや、死因が同じであっても、残された時間をどのようにして過ごすかは人それぞれ違うということを感じた。そして私は、ふと思った。「もし、自分が死ぬと分かったら」「もし、自分が大切な人を亡くし、残されてしまったら」。まだ人の「死」という場面に出会ったことがない私にはうまく想像することが出来なかった。でも、死を宣告された側、残されてしまった側、どちらにしても絶望を味わうことになるだろうと思った。あたり前の日常が突然無くなり、孤独や不安といった苦しみに襲われることは、どんなに辛いか分からないからだ。しかし、人生には必ず終わりというものがある。その終わり方は人それぞれであり、私にもいずれその日がやってくる。どんな状況で死を迎えるかは分からないけれど、私は「もうこれ以上幸せな人生はない」「この世に産まれてきて良かった。」そう思えるようにしたい。そのためには、一日一日を大切に過ごさなければならないと思った。一日中何もしないで過ごすのも悪くはないと思う。でも私は、多分死ぬ時に「あの時これやっておけば･･･」と後悔するだろう。私にとっての人生最高の過ごし方とはどういうものか。今までの日々を振り返り、考えてみた。私が出した一つの結論は、「常にチャレンジし続ける」ということ。何かに挑戦する勇気、そ

れを達成した時の達成感を味わうことは、私にとって一番人生の糧となり最高の瞬間なのではないかと思う。
これからどんなに辛いことがあっても、諦めずに挑戦し続けることで、より強くなった自分を見つけていきたい。そして、私にとって最高だと思える生き方をしたいと思った。

『記憶屋』
織守きょうや 著　302頁　角川ホラー文庫　2015
『世界から猫が消えたなら』
川村元気 著　229頁　小学館　2014
『君の膵臓をたべたい』
住野よる 著　325頁　双葉文庫　2017
『永い言い訳』
西川美和 著　341頁　文藝春秋　2015

〈高松キャンパス　夏休み体験文〉

優秀賞

失い、気づき、得たもの

機械電子工学科２年　丸尾 美月

９月４日の夕方、母方の祖母が亡くなった。朝に祖母が危篤状態だという連絡を受け、帰省した兄と共に祖母がいる介護施設へ急いで向かった。部屋に入ると、職場から直接駆け付けた母と、心電図モニターや人工呼吸器を着けている祖母がいた。その後、祖母の手を握ったり、声をかけたりしていたが、数時間後に静かに息を引き取った。
そこから怒涛の日々が過ぎていった。納棺の儀では、祖母が旅立つために自分ができる最後の手伝いだと思い、臨んだ。通夜、葬儀では、想定していた以上の人が集まり、祖母はこんなにもたくさんの人々に愛され、支えられていたのだと実感した。火葬後の骨上げでは、祖母にはもう会えないという実感が急に湧いてきた。その後は、私と兄で手分けをして必要な書類を作成したり、母と叔母と一緒に法事の打ち合わせをしに色々な場所へ出向いたりしていた。
祖母とは私が幼い頃からたくさんの思い出があり、色々なことを教わってきた。祖母は20年程一人暮らしをしていたため、毎日顔を合わせることは無かった。それでも週に１回母と祖母と私の３人で昼食を食べに行き、買い物をした後に祖母の家に帰って、雑談をしながらおやつを食べるということが中学生のころまで続いた。このような日常がとても幸せなことだと気づいたのは、祖母が２年前にパーキンソン病だと診断されてからしばらく経った後だった。
転倒時の骨折で自宅での生活が困難になり、施設へ移ることになった。場所が少し遠いためになかなか会いに行くことができなかったが、行ける時はできるだけ会いに行こうという気持ちだった。それでも祖母の元を訪れるたびに口数が減っていき、病気が進行していることが分かるため、「もっと自分が傍にいてあげられたら」「私に何かできる事は無いのだろうか。」と考えることも多かった。
そんなことをあれこれ考えているうちに、９月４日になった。その日は音楽スタジオを借りてのバンド練習があったので、出かける準備をしていた。その時、「おばあちゃんが危ない状態だ。」というラインが母から送られてきた。家に一人でいた私は、遠い場所にある施設に向かうことができず、途方に暮れていた。父が仕事から帰ってくるのを待っていたら間に合わないかもしれないと思っていた。そこに、同じく母からの連絡を受けた兄からラインが来た。普段千葉県で働いている兄は、「早退して飛行機で香川まで帰るからタクシーでおばあちゃんの所まで一緒に行こう」と言ってくれた。ずっと一人で不安だった私は、少し救われたような感じになった。４時間後、私はバスで高松空港まで向かい、兄と落ち合った。祖母のいる施設に着いて部屋に入り、その後は母も交じり、祖母にも聞こえるような大きめの声で兄と近況報告をしていた。祖母は目を開けることは無かったが、久しぶりに帰省してきた兄の声を聞いて、微笑んでいるように見えた。２時間後、祖母は眠るように息を引き取った。
私は改めて、今までたくさんの人々に支えられて来たのだと実感した。幼いころから様々な事を優しく教えてくれた祖母、いつも私のことを気にかけてくれ、今回もタクシーで一緒に行くという提案をしてくれた兄、祖母が亡くなった後に涙を流した私を慰めてくれた母。私は家族にとても恵まれており、受けた優しさを別の人へ返さなくてはならないなと思った。
また、２週間後にお彼岸ということもあり、10年前に亡くなった父方の祖父のお墓参りに行った。父方の祖母と二人で行き、丁寧に墓掃除をしてからお参りをした。帰り際に父方の祖母が呟いた、「おじいさんは美月がお嫁に行く姿を見たいと言っていたが、叶わなかったから、代わりに私が見届けてあげないと」という言葉を聞き、私はしっかりと祖母孝行をして、孫としての役目をちゃんと果たさなければいけないなと心に誓った。
今年の夏休みは一生忘れられないものとなった。作文で書くような話ではないとも思ったが、これまでの気持ちの整理、これからの自分に対しての誓いの意味も込めて題材にした。亡くなった祖母から受け続けてきた多くの知識、技術、そして愛を余すことなく、これからの人生で活用していきたい。

〈詫間キャンパス　書評〉

優　秀

魍魎の匣を読んで

情報工学科３年　山下 真輝

端的に言えば私はこの本を読むことをおすすめしません。エキサイト翻訳のような文章から始まってしまいましたが、これは私が読んでいるときに思った単純かつ素直な感想です。ミステリの皮をかぶったＳＦであるところといい、読後の後味の悪さといい大きく賛否の分かれるところではありますが、客観的に見ておすすめしない理由は読みにくさにあります。初っ端から大きな場面転換を繰り返し、言い回しにも独特の気味悪さを感じる、良く言えば引き込まれるといった感じです。このように

初見バイバイ要素ＭＡＸの出だしでこの本超おすすめ！とはならないかなと思います。

さらに言えば、個人的にも好きじゃない類の本ということもあります。ハッピーエンドとバッドエンド、この２つのうちどちらのほうが物語の終わり方として美しいのでしょうか。多くの思考停止した人間はどっちにもいいところがあるでしょ（笑）とか思うでしょう。しかしそのみんなちがってみんないい的な逃げで物事の優劣を決めることを放棄するのはよくないです。私はハッピーエンドこそが優れた終わり方だと思います。理由は明白であり、バッドエンドというのは基本事象の解決をさぼった、序盤の設定や物語の進行に力を入れすぎて燃え尽きただけの燃えカスのようなものだと考えています。しかしその燃えカスだって面白くはできます。なぜか、それは序盤の進行にすべてを注ぎ込むので、物語自体のバリエーションに富んでいるからだと考えます。どんな絶体絶命の状況も、「はい、みんな死んじゃったね、おわり」ですませればいいからです。その先の展開はまったくの行き当たりばったりでよい。これじゃあ優れていると読者視点ではなりません。逆にハッピーエンドは終わり方にこそすべてが詰まっています。そこの違いから私はこの作品の終わり方に納得がいってないわけです。

ここまでよくないところをべらべらとならべてきたわけですが、そろそろ良いところを言っていきましょう。まず、この作品は読者を裏切り続けるというミステリの観点からすると、至高の作品であると思います。裏切って裏切った先にあるものを考慮してもおつりがくるくらいだと思います。また、事件の推理パートにおいてもＳＦチックではありますが、新しさを感じます。あと、ワトソン役がキングオブ無能なのも個人的には好きです。

さらに全体としていいところを挙げるとするならば、物語を通して伝わってくる不気味な緊張感と、解決パートにおける点と点が一気につながるところがあります。特に読者に対する情報を制限して、点と点を一気につなげるところは盛り上がりの最高潮であり、曇り空に一筋の太陽の光が指すように感じました。実際に世界観に引き込まれ読み進めていった自分からすると、物語の進行は他に類を見ないような、特別なものを感じました。

最後に、この魍魎の匣は文庫版以外にも漫画版やテレビアニメ版があります。よりカジュアルにこの本を楽しんでみたいと考えている人には、それらのほうがとっつきやすくなっているかもしれません。しかし、文字だけで伝わってくる本の良さを存分に楽しんでほしいため、興味があればぜひ文庫版を手にとってみてください。私はあまりおすすめしませんが。

『魍魎の匣』　京極夏彦 著　講談社　1995

〈詫間キャンパス　書評〉

優　秀

沖縄の手記から

1年２組　大西 春歌

本書は、太平洋戦争末期にアメリカ軍が日本に上陸してからの、「沖縄戦」が舞台となっている。戦争の残酷さや悲惨さが描かれているので、暗く重いストーリーとなっているが、沖縄戦争がどれほど悲惨で残酷なものであったかを学べる作品となっている。舞台が沖縄戦ということもあり、戦いの激しい様子が生々しく表現されている。一見、戦争の実態や悲惨さだけについて書かれているようだが、本書の伝えたいことは、それだけではないと思う。助かる見込みがないとわかっていてもただ一人壕にとどまり、部隊が見棄てていった負傷兵たちの手当を続けようとする娘、当間キヨ。彼女の純粋な心が、本書の最大の見どころだと思う。

彼女は民間の看護婦でありながらも、壕にとどまり一晩中負傷兵たちの処置をしていた。負傷兵たちを見捨てることができない純粋な心、彼らの処置を続けたいという熱意。本来なら、軍医はほかの部隊を助ける義務などないのだが、彼女の礼儀正しい態度や、強い気持ちに押されて、軍医は彼女と行動を共にし、負傷兵たちの処置をすることとなる。二人は死臭が漂う真っ暗な壕で、カンテラの明かりだけを頼りに、負傷兵たち一人ひとりに処置をして回った。包帯を巻き替えてやることしかできなかったが、それだけでも負傷兵たちは元気づいた。できることが少なくても、助からないと分かっていても、負傷兵たちを見棄てなかった二人の行動に読者は感動することだろう。この場面からでも、戦争がいかに悲惨なものであったかを感じ取ることができる。

この本は、民間の看護婦でありながらも負傷兵たちを見捨てることができず、壕にとどまろうとする娘と、米軍の攻撃によって基地から南下する軍医が出会う場面で、ストーリーが繰り出される。本書の背景となった実際の場所の地図や、わかりにくい専門用語の説明が書かれていたりするので、話の内容をつかみやすいと思う。また、場面ごとに話の情景や登場人物の心情などが細かく描かれていて読みやすい。登場人物の動作などの表現も工夫していて面白い。

残酷な戦争の恐ろしさや愚かさを重々しく感じつつ、当間キヨの純粋な心や熱意にも、ぜひ注目してもらいたい。

著者は、『足摺岬』『霧の中』『異母兄弟』『ある女の生涯』など、多くの作品を残している田宮虎彦である。歴史小説や自伝的小説だけでなく、戦争や社会問題を題材にした作品も多く手がけている。本書の『沖縄の手記から』は1972（昭和47）年、雑誌「新潮」で発表されたものである。

この本は、沖縄戦という凄惨な戦争の過去をとおして、戦争の残酷さや悲惨さを教えてくれる。この本を読んで戦争の悲惨な過去を振り返ることで、現代の、平和で豊かな生活がどれだけ恵まれているかを改めて感じることができた。そして、当間キヨの、自分の命よりも負傷兵たちの命を大切にしようとしていた純粋で優しい心に感銘を受けた。いつの時代も、人を思いやる純粋で優しい気持ちを忘れてはいけないと感じさせてくれる作品であった。

凄惨な戦争の残酷さについて改めて考えさせられるこの本は、戦争の悲惨な過去を振り返るにはおすすめの作品だと思う。当間キヨの純粋な気持ちや、人々の必死に生きようとする姿にも注目しながら、一度手に取って読んでもらいたい。

『沖縄の手記から』　田宮虎彦 著　新潮社　1972